
Secretariat-**幸せのエリート**-

瀬田 和佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Secretaryat - 幸せのエリート -

【Nコード】

N2652H

【作者名】

瀬田 和佳

【あらすじ】

ギャロップ・ホーンズは、月夜に一人、父との思い出にひたっていた。そのうちに彼は知った。遠い昔、ある『幸せのエリート』と出会ったことが、父親の運命と『幸せのあり方に対する考え』を大きく変えたということを……その名は、セクレタリアト号——『早く走れる』その才能ひとつで幸福な生を掴んだ、最強の競走馬だった。

父親について、少々

窓の外より洩れ入る月光の明るみが、とても幻想的で美しく思える。ここが昼間には世界一やかましくごった返すマンハッタンだとはとても思えないくらいに。だがその実に適度な騒音もまた悪くない。考え事などするには素晴らしく適した夜だ。

私は今、薄暗いリビングで一人椅子にもたれて思い^{ふけ}に耽っている。普段ならまずやらないストレートでウイスキーを[あおり](#)ながら、ずいぶんと長い間顧みなかった『遠い昔』に思いを馳せているのだ。「そうか…… 『あれ』ももう30年、いや35年以上も前のことか……」

私がまだ学校にも入っていなかった幼き頃のことである。

まったく不思議だ。飲んだ量も決して少なくなく、隔てた時間も相当の長さだというのに——どうしたことだ、蘇ってくる記憶はやたらに鮮明ではないか。

思い出される事のほとんどは、私にギャロップ（Gallop）などという奇怪な名をつけた父に関する記憶だ。

聞くところによると、父は、バージニア州リッチモンドの片田舎で生まれ育った。その父は若い頃、幼少から続いた貧しい暮らしに嫌気が差し、まさにアメリカンドリームを夢見る形でニューヨークの地を踏んだ。「夢の架け橋を何としても渡り切つてやる!」と、アメリカを象徴する長身の女神を前にそう叫んだんだとか――

その時立てた誓いは紛うことなき本心だったろうが、かといって「金のためなら、どんな手を使ってでも……」とまでは考えなかったようだ。あり余る劣等感によって育てられたような身の上でありながらそのようなフェア志向を失わなかったのは、やはり『あれ』のおかげなのだろうか。

『では、金とやり甲斐、二つの望みを同時に満たせることとなると、自分にとってそれは一体何なのだろうか……?』彼は考えた。

通常であれば、それはただだけ時間をかけて考えても足りないような、人生において最も難解な命題の一つに違いない。ところが彼は、自身の『これしかない』とも断言できる完璧な答えを、驚くほど早くに見出すことができた。

それが、競馬だった。彼は馬を心から愛する者の一人であった。

最初は子供心にサラブレッドの雄大な体格や走るスピードに魅了された。本当に幼く単純な動機だった。学校終わりなど、暇さえあれば近所の牧場に足を運び、緑の大地や夕焼けをバックに、身の丈ほどもある柵ごしにまじまじと馬を眺めた。その時間が彼の何よりの生きがいだった――というよりは、すでに生活の一部だった。日が暮れて、両親（つまり私の祖父母）のどちらかがうんざりした顔で迎えに来るまで飽きもせず牧柵にかじりついていたのが『いつものこと』だったらしいから。馬の糞尿というのは人間のそれと比べて考えられない程の刺激臭を放つが、彼はそれすら愛す

るうちに含めた。

その変態的とすら言える想いを理解したのはやはり馬に携わる者達だった。よって、父は牧場従業員らとは非常に話が合ったし、気を許し合った。それ以上にありがたかったのは、その好奇心をますますかきたてる、馬に関する知識や情報にも困らなかった事だ。そしてやがて牧場の外から、内へと——いつの間にか彼は、牧場にもただの“馬好きの坊や”ではなく、“ホースマンの卵”という目で見られていた。

子供から男子へと成長する年頃にさえ、その熱情はいつこうに冷めはしなかった。が、その間の彼の馬を見る目には、若干の変化が見られた。自身の貧しさによる劣等感が影響したのだろうか、次第に毎日のように目にする馬たちを『優劣』や『個性』の観点を用以て見るようにもなった。一日に何時間もの見学を、何年間も続けた。

そのうちに彼は、はからずも競走馬に対する人並を外れた敏感さを獲得するに至った。それがのちに彼の武器となったことは、敢えて語る必要もなからう。

どのみち高校へ行くほどの金もなく、それどころか家庭そのものがいつ食いはぐれてもおかしくない窮状にあったのだ。自身のため、家族のために、父は迷わず家を出ることを決めた。そして一週間を食いつなげるかどうかも怪しいわずかな金だけを手に、ニューヨークへ渡った。弱冠15歳のことである。

何のつてもない彼だったが、幸運にもすぐに住み込みの見習いとして、競走馬の素質や成績をもとにレース予想などの情報提供をするトラックマンなる職に就くことができた。

そこからは、父はまさに怒涛のごとき躍進を体現した。知識、熱意、行動力、勝負勘……彼はいずれをも凄まじい高水準で兼ね備えており、それはまさに“競馬の申し子”と呼ばれるにも十分の

才覚であつた。すぐに周りの百戦錬磨たるエキスパート達をはるかに凌ぐ相馬眼そうまがんを発揮して見せつけ、瞬く間に競馬に関わる者たちからの信頼を勝ち取つていった。

10年が経つ頃には、もはや東海岸界限において最も名の売れたホースマンの一人となつていた。それから自分の手腕と築いた人脈をもとに、次第に将来性ある仔馬の売買の仲介も担うようになった。さらに勇敢なことに、好機と見れば時には数万ドルもする仔馬を自ら一時所有し転売する仲買なかがいすらも行つた。

ちなみにのちに私の母となる、行きつけのカフェの店員だつたパメラ・チエーソンと付き合い始めたのもこの頃だつたようだが、どうやら関係をリードしたのは常に母の方だつたらしい。それもなかば観念したように。父はいつまで経つても馬ばかり見ようとする、男性としてはどうしようもない欠陥の持ち主だつた。

ともあれ一代にして体一つから財を築くことに成功した父親は、まさに競馬によつてその人生を救われたような男だつた。少なくとも私にはそう考えられた。

そんな父親であるから、競馬に対して相当の愛着や敬意を抱くのも当然だつたろう。息子にギャロップなどと名付けてしまったのも、なるほどその点を考慮すれば無理もないことかもしれない。もつともこちらとしては、「自分勝手なことをしてくれたものだ」と、呆れにも似たいささかの憤りはおぼえるところだが。

なお彼は、私がグレードスクール（小学校）に入学する頃を境に、自ら第一線を退いたようだ。後に聞くには、仕事はそこそこの家庭を優先する暮らしを選んだから、とのことだ。

こんな彼の半生が示すとおり、彼は私にとって少しかり変わった人物で、だが一方でそれなりに尊敬に値する父親でもあつた。

「……………」

追憶の最中^{さなか}にある私の脳裏であつたが、実はつい先程から、特に『ある一日』のことばかりが、何度も何度も、繰り返し浮かんできている。記憶が確かならばそれは1973年、私が5歳になったばかりの頃のことだ。

その年の6月9日——見上げればそこには、文字通り「広大」の一言に尽きる青空があった。だが、目線を水平に戻したところに映るベルモントパーク競馬場もまた、その青空とも互角だろうかと形容したいほど、それまで見たこともないような広大な場所だった。幼い私にとっては、まずそれが印象的だった。

グラマラスなRV車の後部座席からぴょんと飛び降りた私を待ち構えていた父は、

「ふう、よし、ここが目的地だぞギャロップ。疲れたか？ 腹は減ってないか？」

と、その禿げかけの短い白髪、少し不健康そうにも見えた長身やせ型の体つきに反し、自信のようなものが漲った野太い声で私に聞いてきた。私は自分の首をほぼ限界まで後ろに倒して父を見上げ、答えた。

「うん大丈夫。でもねパパ……」

「何だ？」

「今日はどうしてお出かけしたの？ それになんでママはお留守番なの？」

「そうだな……ここは、女の人にとってはあまり楽しくない場所だから、かな」

「ふーん……それで、ここってなんの場所なの？」

父はやはり妙にもったいぶった口ぶりで「なあに、すぐにわかるさ」とだけ答え、不敵に笑っていた。

当然といえば当然だが、私はこの時、まだ競馬の何たるかなど何一つ知らない子供だった。先生の体調不良からこの日あるはずだったピアノのレッスンが休みになり、そのかわりのお勉強だといって半ば強引に父に連れて来られたここが、まだどういう場所なのかすら見当もついていなかった。ここに来るまでの車中でも目的地のことを聞いてはみたが、まったく教えてはくれず、「行けばわかるさ」の一点張りだった。それでいて親子揃ってどう見てもただごとではない正装をしているのだから、不思議さは増すばかりだった。ミサのような退屈なイベントに巻き込まれるんじゃないかと、少なからず不安にも思った。

「じゃあ行こうか、ギャロップ。ここは本当に広いから、迷子になんかなるんじゃないぞ」

私は父の手に引かれながら、本当にここがニューヨーク市内なのかと思うほどファンタジック、かつ巨大な入場ゲートをくぐった。

父がここに来た目的は大まかに二つあった。仕事関係者との付き合いのため、そして、歴史的瞬間を息子とともに見るためだった。

「う……わあ……」

競馬場内に入るや、その光景は幼き私に相当の衝撃を与えた。

5歳児の想像しうる「こったがえした状況」をはるかに超えた人だかりが、観客席を埋めつくしてウジャウジャと騒がしく波打っていたのだ。そんな彼ら一人ひとりもまた、もれなく父親と同じ目的でそこにいた。『偉業』をその目で見たかったのだ。

競馬に関わる者、いや競馬を知る者ならまず疑う余地のない一つの事実がある。それは、競馬における最高峰の栄誉が、三冠トリプルクラウンの制覇であるということだ。これは古今東西を問わない。発祥国のイングランドはもとより、フランス、アイルランド、さらにはサウスアフリカ、ホンコン、ジャパン、そしてこのアメリカも含め、三

冠の偉業を成した馬は、例外なくその国の競馬史に名を刻むことができる。

そしてこの年、その三冠レースのうち一冠目のケンタツキーダービー、二冠目のブリークネスステークスを、他の相手馬をまさに圧倒する走りで、しかもいずれもレース新記録となるタイムにて連勝してきた一頭の馬が、この日、私と同じ場所にいた。この二冠馬セクレタリアト（Secretaryat）が、満を持して最後の一冠ベルモントステークスに挑む姿を、父親と数万もの観衆は是非でもその目に焼き付けておきたいと集まったわけだ。

メインレースのベルモントステークスは最後、昼すぎに行われる。いわばその前座試合にあたるレースが行われている間、父は私を連れ回し、場内に来ている色々な仕事仲間とおぼしき人物に挨拶し話を交わしていた。

「Hey！ 久しぶりだな、ライアン君。 元氣そうで何よりだよ」
「これはこれは、Mr. キャセル。 いつも世話になっています」

こんな調子で、父は白髪と白髭が見事に一体化した恰幅の良い老人、どうやら騎手らしい若い男性、あるいは一歩間違えばギャングか何かに見えそうな屈強そうな男にも次々と声をかけ、逆に声をかけられた。 かくも様々な人たちと時折笑い合い、握手し、照れくさそうに私のことを紹介してゆく――家では見たことのない父親の一面に、私は少なからず戸惑ったものだ。

久しく忘れていた、だが決して生涯忘れ去ることなどないだろうレースシーンが、先程までの追憶に輪をかけて鮮やかに蘇ってきた。

レースが始まろうとしている。関係者である父の特権なのか、私たち親子は観覧席どころか、それよりもさらに馬を間近で見られる、レースコース内側のターフ（芝生コース）内で観戦することが許されていた。降り立った広い芝生には、その日何度かレースに使われたことで、ところどころに豪快にえぐられた跡と蹴り上げられた土のつぶてが散乱していた。そこかしこから漏れて感じられる土の匂いも印象的ではあった。しかし、そんな足元にも多少目を引かれはしたものの、向かい合う観覧席を埋めつくす人、人、人…… 仰ぎ見渡す限りの圧倒的な迫力には遠く及ぶものではなかった。

しばらくすると、そこにいる全員が姿勢を正して黙り込んだ。それまで絶えず耳に届いていた場内の騒音がピタリと止んだわけなので、それは少し不気味でもあった。このレースでの儀式となっている『ニューヨーク・ニューヨーク』の斉唱である。まだ歌詞を知らなかった当時の私は口の動きばかり隣の父を拙く真似て、なんとなく聴くのみだった。だがそのことを差し引いてもなお、数万の観客が一齐に「私のほうに向かって」大合唱を行っている——なぜ今まで忘れていたのだろうか——その光景たるや、思えばこの人生のベスト5に入るほど、私の心の中には確かな爪跡として残された。

この目に映るたった5頭、しかしいずれも全米クラスの名馬たちがスタートゲートに入り始めた。当時の私にとっては、たった5頭だった。実際は一概にそうであるとも言えなさそうな事情があったわけだが。

このベルモントステークスがアメリカのダート（砂地コース）競馬には珍しく、他にないほどの長い距離で行われるレースであること、三冠レース自体もおよそたった一ヶ月の間に全てが行われるハイドスケジュールであること、そしてあるいはまさにこの年のよう

に、あまりに實力差のある敵の存在を理由に路線変更する馬が続出することなど——それらの特殊性が作用する結果、必然的にこのレースは、それが持つ最高位の格に似つかわしくない程の小頭数による戦いになりがちなのである。

今にして思えば、三冠に手をかけたセクレタリアトの力は、誰もが恐れをなして仕方ないほどに神がかっていた。すると驚くべきは、逆にそんな相手にも怯むことなく最後の一冠を奪い合おうとした勇敢な馬——それが他に4頭もいたことだったのかもしれない。

ゲートインが完了した。父も含め観客のほとんどは、ゼッケン1番、5頭のうちの「別格」の一頭に釘付けだった。

「さあて、ギャロップ。お前もこのレースが終わる頃には、馬に魅せられることになるか……？」

父も興奮気味に語りかけたが、それは私にしてみれば言われるまでもないことだった。血は争えないといったところか——既に私は、ゲートの中でそれぞれ目覚ましい覇気を放ってスタートの瞬間を待つ優駿たちに、抽象的ながらも、本やTVの中で見かけてきた単なる「うま」とは違った異質さを感じていた。つないだままの父の手にはかなりの湿り気が感じられたが、果たしてそれは、まったくお互い様だったのだろう。

そしてついに、けたたましく鳴ったベルの音とともにゲートが開いた。一周2400メートルのオーバルコース、それを誰よりも早く一周して栄光を掴まんと、5頭の優駿たちは一斉に駆け出した。ターフコース外側の埒、馬たちを最も間近で見られる位置で叫ぶ私たちの前を、彼らは若干の獣の匂いを含んだ一陣の突風となりながら、右から左へ駆け抜けていった。

しかしレースが始まってわずか数秒、それは各馬が第一コーナーにも達しないうちのことであった。それまで最高のレースを願っ

て高らかに送られていた歓声が、とたんに悲鳴にも似た汚らしいどよめきへと変わったのだ。

その理由は明らかだった。これまでのレースでは中盤から終盤にかけての勝負所で鮮やかに馬群を抜け出し、スマートな戦法で勝ち続けてきた（らしい）セクレタリアトが、この日、スタート直後からぐんぐんと他の馬を追い抜いて先頭に立つ異常事態を見せているのではないか。事実、その瞬間の父はもの凄い顔で、薄い頭を乱暴にかきむしって嘆いていた。

「Oh, my gash! どういうつもりだ畜生め! 何を舞い上がってやがる、『ビッグ・レッド』!」

彼が言うには、その走りは12ハロン（約2400メートル）のレースでは無謀としか言いようのない、常識はずれのハイペースだったようだ。

しかし観客のどよめきをよそに、まるで部外者、先導者のように、ぐんぐん馬群を引き離そうと加速する栗毛の巨体。

そのセクレタリアトを一度下したことがあり、一応のライバル的存在との評価を得ていたゼッケン5番シャム（Sham）とその陣営は、さぞ面食らったことだろう。セクレタリアトとは対照的に、いつもは彼こそが序盤から先頭に近い位置で主導権をとってレースする馬だったからだ。最も警戒すべき相手が最初から自分よりも前に居るとは、まったく予想外だったに違いない。これに何かを感じたか——あるいはその何かとは、『ビッグ・レッド』からの強烈な威圧感だったのだろうか——シャムは横の馬群に目もくれず、決死の覚悟でペースを上げてセクレタリアトを追走した。レースは互いに大きく離れた2頭と3頭の集団による、非常に珍しい展開となった。

広大な競馬場の向正面にさしかかり、実に私たちから500メートル以上離れた位置を走る先頭の2頭とそれを追う3頭は、蟻のよ

うな小ささでチヨロチヨロと動いていた。客席からの悲痛などよめきはいまだに鳴り止んではない。だがそれでいて先頭を争う両者の間には、わかる者にはわかる対照的な違いが顕れていた。

『余裕』という概念の、まさに最も適当な例にも思われた。外側で半馬身程度リードするシャムはいかにも全力疾走といった印象で、人馬ともに体全体が躍動し、懸命さを丸出しにしたような走りだった。対する内側のセクレタリアトといえば、ワールドレコード級の超ペースを維持しながら明らかに余力を残した走りでもすれば氷上を滑走しているかと思うような安定感があった。騎手も目に見えてリラックスした体勢でセクレタリアトのピッチに腕の動きを合わせるだけ、あえて手綱たづなを捌く必要すらない様子だった。両者の競り合いの行方は、この時点で既に決していたようなものだった。

6ハロンの中間地点、本当ならばまったく非凡な実力と負けん気を持っていたシャムが、そのあまりに驚異的なペースにとうとう音をあげた。見込みよりも数倍恐ろしい目の前の怪物に対し、文字通り後塵を拝す形ですると後退していった。セクレタリアトはなおも、そのスピードに対しても合理的な説明などできないほどに至極滑らかで落ち着いた走りが続けていた。

4コーナーを独走状態で回って最後の直線に戻ってきたセクレタリアトには、またさらに大きさを増した歓声がスタンドから送られていた。彼がその鬣たてがみや尾を水平になびかせて、まさに風となったかのように疾走するのに合わせ、誰からともなく、とても整然としたウェーブさえ起こっていた。すでに2番手以下を20馬身近く引き離している。普段のレースであればとうに完走している距離を逃げ続けてなお、最も速く走っているのはセクレタリアトなのだった。

歓声とウェーブ、そして伝説になろうとしている馬がどんどんこちらへ近づいてくる。レースの最初では失望としての驚きを露わにした父だったが、この時はもう、眼前の常識を軽く超えた光景に對しての、失望とはまた違った驚きと混乱の只中であつた。

そんな父にものを知らない私は無邪気に尋ねた。

「ねえパパ、一番前のお馬さんはなんて言うの？」

そのとき答えた父の声には、子供の私にも容易く読み取れる、珍妙な震えがわずかに含まれていた。

「ん？ あ、ああ…… あの手はな、セクレタリアトっていう名前の馬さ。すごく強い馬で、ここにいるみんなのスーパーヒーローなんだ！ どうだギャロップ、あの馬はすごいだろう！」

スーパーヒーロー……その言葉の意味はもちろんすでに理解していたが、この時の私にはどうも、セクレタリアトの姿がどのように評されることに對して何か違和感のようなものが拭えず、ふと声に出して困惑した。

「でも…… あのお馬さん……」

それはつぶやく程度の小声だったし、おそらく父には届いていなかったのだろう、そう思った。実際に父からは、少しの間だけ驚いていたようにも見えた他は、まるで応答が返ってこなかった。だが、それならそれで良かった。ほとんど訳もわからず口走ったことだ。もし掘り返されていたら逆に困っていたところだ。

ゴールまであと30メートル。砂粒を荒々しく跳ね上げ、見上げるばかりの巨体は一瞬で私達の正面を駆け抜けていった。セクレタリアトの獣臭い残り香すら消えようとしていた頃に、後続はようやく私達にその蹄の音を聞かせるかどうかの位置にいた。

私がわずか5歳の頃のことをこれだけ克明に覚えていたのは、単に思い出深かったから、というだけではない。これが2着に31馬身（約80メートル）もの大差をつけ、勝ち時計2分24秒0という驚異的なワールドレコードを叩き出したレースだったからでもあったのも大きかった。当時の専門家をして「このタイムは永久に破られはしないだろう」とまで言って絶賛した走りだった。実際30年以上経った現在も、更新はおろか遅れること2秒以内のタイムに迫ることができた馬さえ出ていないのだから、時が経つほどに彼の伝説の激走は自然と忘れがなくなっただけだ。

セクレタリアトは、その比類なき速さによって、多くの人間に愛され成功した馬だった。

成功者は語る

——だんだんと歓声や蹄の音が小さくなり、私はまた静かな夜へと戻ってきた。今この目に映るのも馬鹿でかいダートコースではなく、ここ数年すっかり見慣れた木目のテーブルだ。いつの間にか、ウイスキーの瓶もすっかり空っぽになった。おっと、だいぶ頭も朦朧としてきている。

しかし、そもそもなぜ私はこんな事を思い返していたんだろうか。とても大事なことだったような気がするが……

ああ、そうか、そうだった。今までグラス片手に読んでいた『これ』のせいだったな。

椅子にどっかりと腰を落としてうなだれる私が左手に持つ冊子。それは父が3ヶ月前から昨日まで、毎日欠かさずつけていたという手記である。

その父は、今朝逝った。

ニューヨーク市内の病院、そばで私たち家族が看取る中でのことだった。死因が食道がんであったにしてみれば、比較的安らかな最期を迎えたと言えるだろうか。享年68であった。

そして夜になった頃、葬儀の段取りや、父と深い間柄だった人物への報告などの後始末がようやく一段落した。解放された私はクイーンズの自宅にて、たった一人で心おきなく父との思い出に浸っていたというわけだ。

一年前、父が最初にかんに冒されたのは膵臓だった。これは手術で一部を取り除くことで難なく治癒した。二度目は胃に転移したもので、これも手術と壮絶な内科治療に耐えた結果、辛くも克服した。だが3ヶ月前、立て続けに三度目のがんを食道に発見した時、もはや完治目的の治療が行える体力はないとの診断が突きつけられた。いわば三度目の勝負を強制的に棄権させられたようなもの——セクレタリアトの軌跡とは、惜しいところで一致しなかった。

安らかな最期のための終末期医療を受けながら、父は亡くなるまでの3ヶ月間、とにかく言い残したことがないようにと、私たちがいないところで夢中でペンを走らせていたようだ。

死期の近い境遇におかれた父が遺した言葉はそのどれもが少なからず私の胸を叩いたが、そのうちのある日の言葉は、さらに群を抜いて痛烈な重みを携えていた。その日の文面は、どちらかという^{タイミナル・ケア}と筆不精だったはずの父がずいぶんと長く書き連ねた、私が敬意を表する『成功者』その人による、主観的な思いの丈だった。私は先程から何度も、とりつかれたように無意識にその部分を読み返してしまっている。

！
俺の人生は、たぶん幸福だ。

ただ、今日この時、『なぜ幸福だったか』を改めて考えてみて、まっさきに連想したことがある。

それは忘れもしない1973年のベルモントステークス、俺の人生が大いに変えられた日の出来事だ。

どういいうきさつだったかはもう忘れちゃったが、ギャロップと一緒にベルモントパークまで連れていったことが運命の分かれ目だったな。

目当てのベルモントステークスをギャロップとターフ内で観戦したが、もちろんレース自体も凄まじい興奮をおぼえる印象的なものだった。あの時セクレタリアトが圧勝した姿は、ひよっとしたら死んでも忘れてないんじゃないかってくらい鮮烈に覚えている。

しかしそれ以上に、俺の意識を根底から変えるきっかけとなったのが、ギャロップがそのレースの最中にポツリと呟いた言葉だった。これを福音か何かだと言っては大げさだろうが。

圧倒的な独走でゴール前を通過しようとするセクレタリアトに対し、ギャロップは小さく、だが確かにこう言った。

『でも、あのお馬さん……　ひとりぼっちで走ってて、なんだかわいそうだよ』とな。

大きく一頭遅れた馬に言うならまだわかるが、大勝ちしている馬に対して言った、それが忘れられない。勝負の世界に浸りすぎた私みたいな人間には、なかなかこたえちゃったんだ。

最初はギャロップにこういう内容を説明してやろうと思っていた。『なぜなら競走馬というのは走るために生まれてきたんだ。だからあんな風にひとりぼっちになるくらい強いほうが、みんなが褒め

てくれて幸せになれるんだよ』と。

これは俺自身が何十年もかけて学んだ事実だ。これは確かなことだ。競走能力の優れていることこそが、自身に『幸せな馬生』を呼び込む要素の大部分だ。

だが、それをいざ言葉にしようとした瞬間、ギャロップの言ったことを笑ってたしなめることができなくなった。馬はともかく、ふと人間に、さらには私自身に置き換えて考えてみると「それは恐ろしく核心をついた一言なんじゃないのか？」そう思ったからだ。

急に、愚かしく感じられたよ。馬生と人生とを一緒に考えたながらわが子を育てようとしていたという事がな。

馬生に考えられる『幸福のかたち』と、人間におけるそれとが全然異なるということを、あの時までにはまったく理解していなかったんだ。

息子の一言でようやく気づかされたために、思わず黙り込んでしまったよ。

そもそも俺が競馬というものに魅せられたのも、ひよつとするとそこに――馬自身の実力次第で幸せを勝ち取れる環境に憧れたのが原因の一つだったんじゃないかと今は思う。実績が幸せな余生に直結する単純明快な成果主義、それが自分にとって羨ましく見えていたのかもしれない。

そこへあの日、息子からとてつもなく重大な疑問を突きつけられた思いがした。

『成功することが、幸福となる』 馬の世界ではあてはまるが、同じことが人間にも言えたか？ と。

学のない俺だが、こればかりは断言できる。間違いない“NO”だ。

人間の幸せに対する価値観、そのまま欲望と言い換えられるものは、もはや自分達でさえ手に負えないほどに複雑になっている。

金がたくさんあれば幸せ。家族と笑いあっているられば幸せ。困っている人々を救えば幸せ。何者によるしがらみからも解放されてひっそりと暮らせれば幸せ……

幸せのかたちといっても、その種類の数はとても把握できる量ではあるまいし、しかも何かの分野において優秀であれば掴めるものとも限らんだろう。ほとんどは運否天賦によるだろう。それどころか時には、優秀な者ほど不利を被ることも珍しくはあるまい。

100mを9秒で走れる人間がいたとして、なるほど確かにそいつはあらゆる大レースで、他の選手達が過酷をきわめるトレーニングを積み重ねて得た成果をもとめず叩き潰し、楽勝することができるだろう。が、それによって多額の賞金と称賛を得るであろうそいつは、果たしてただ一人飛び抜けた能力を持つ境遇をどう思うのだろうか？

野心にまかせ、ただ成功を掴みたい一心で盲目的に行動しているうちは良い。だがひとたび成功を掴んだ後では、そいつの心は大いに虚しかろう。昔はどうだったかわからないが、もし今の俺だったら、まっぴらごめんだな、そんな人生は。申し訳なさに似た、言うなればネガティブな使命感にやはり悩まされる気がしてならなからな。これは世にはびこる、人類がみな平等であるべきとの思想による。まるで、ある能力に秀でれば別のところでは劣って

いるか恵まれずにいて、その合計は常に一定の値に近くあるべきだと暗に主張するような。よって、優れた特長をもつ者は、見合うだけの不幸な生い立ち、または苦労や挫折があつて初めて周りから成功を掴むことを許可されるような風潮がまかり通つていると感じる。これを破れば、当然のように妬みや非難が向けられる。

俺が成功者、まして有能であつたなどとはなんとも言いにくいが、破産や精神病に陥る同業者も多い馬の世界でまずまずの稼ぎを得られたこと、それでいて多くの気の合う友人にも恵まれていたことを考えると、平等性のバランスは私の少年時代に課されたハンデで調整されたこととして、周りに経済的成功を許可されていたからかもしれない。

それはそれで、ますます危ないところだつた。実は成功した後こそ油断ならなかつたようだからな。人生というものは、幸せを求め続けると、そこには何らかの犠牲がつきものとなる。金のために人望を失つたり、愛する者のために時間を削つたり……それも、犠牲を払う時までその重大さがどれほどのものかはつきりしないから、大変タチが悪い。

俺がそのままラックマンとしてやれるだけやる幸福を追い続けていたなら、いずれ別の部分で大きな代償を払うことになつていただろう。それが何になるはずだつたかを考えるのに、今更興味はないが。

その点俺は本当にラッキーだつた。あのベルモントステーキスの日、経済的・社会的成功と引き換えの、何らかの犠牲が確定する前に目を覚まし、人生の方向転換を行うことができたのだから。まぐれには違いないが、あそこで身を引くのがまさに理想的な勝ち逃げだと思つた。

若いうちにがむしゃらに働き、まず経済的・社会的に満足した。そしてベルモントステークスでの息子の一言をきっかけに、もっと広い視野での幸福を意識するようになった。家族と過ごす時間やボランティア活動などにも果てしない興味が湧いた。本当に満足できる人生を送ってきた。

極めつけに、心から愛した馬と、そしてパメラとギャロップと生涯を通して関わっていられたこと。今考えると、本能的な満足をも得ていたかな。

よって、およそメジャーな幸福は全て手に入れたつもりで旅立とうとしているこの俺は、本当に幸福なやつだ。

ただそのかわりにパメラやギャロップには、俺の勝手な持論に付き合わせて随分と振り回してしまい、手痛い貧乏くじを引かせる形となってしまったがな。あまりに遅いが、この場を借りて謝らねばならんだろ。すまなかった。

主よ、これからの彼らが過ごすのが、こんな俺などと暮らしたハズに十分見合うだけの幸福に満ちた未来であらんことを求めます。彼らがそう思っただけのものでも構わないので。

俺自身も天国から（まさか地獄行きにはならんだろ）あいつらの今後を見守れるよう祈って、今日はこの辺でペンを置くことしよう。

読むにも難儀する汚い字だが、父の無垢な思いは十分に伝わってくる。

私たちの前ではスーパーマンのように自信に満ちていたかつての父が、実は『優れた成功者である故に陥る苦悩』を抱えていたとは、意外だった。ましてそれが、私のたまたま発した一言がきっかけだったなんて。

それでも私は、そこを乗り越えて後に成功と幸福の両得を果たした父を、やはり誇らしく、眩しく、羨ましく思う。

だがそれだけに、残念でならない。今どれほど父を誇り羨んだとしても、父が神に願ってくれようと——私はもう、彼のように多義にわたる幸せを得られる人間にはなれそうもない。

幸せのエリート

私は現在、大きいとは言えないながらも、会社の経営に勤しむ身だ。

父のおかげで、私が育ったのはまさに絵に描いたような裕福な家庭といえた。私は大学まで進学させてもらえ、子供の頃から興味を引かれてやまなかった中国の歴史・文化の研究に没頭する事ができた。嫌味を承知で言ってしまえば、私はその後も、大学院以後の研究者としての人生、企業への就職、あるいは自ら事業を起こすこと、どれを選ぶこともできる立場にあった。

結局は大学の卒業後すぐ、資本のほとんどを父から借りる形で、中国を中心としたアジア雑貨の輸入販売を行う会社を設立した。しかも経営のノウハウ習得や安定した取引先の確保にあたって、またしても広い人脈を持つ父に頼った。

本来は決して割の良い業種ではなかったものの、それでも10年ほど前に全米を席卷したアジアブームに便乗し、我々もかなりの恩恵を受けることができた。その際に父からの借金も完済を果たしたし、会社自体もローリスクな経営方針で十分にやっていける基礎体力がついていた。

運に助けられたか、それともまさか私の秀でた特長によったのか……会社経営にまつわるあらゆる苦労は当然経験したとして、それに対する十分な見返りを得られたことで、私は一応の『成功』は

掴めた気でいた。

本当にわずかな差だった。あとほんの少し早く彼の最期の言葉に触れていたなら——私も同じく、色々な幸せのかたちの存在に共感し、またそれを求めようとする人生を選んでいたことだろう。

父の死が、1ヶ月前——私が経営の拡大に踏み切るよりも前のことであつたなら。

すでに増資のための資金や目ぼしい人材を方々からかき集めている。社員一同も凄まじい士気の高まりを見せてくれている。何より社長の私自身が「10年以内に年商2500万ドルの突破を目指す！」と、具体的な目標までぶち上げた後である。これはすでに、とても白紙に戻せる状況ではない。

取引相手にお世辞を言われ、社員の皆にも慕われ、私は確かに自らの商才を高く評価してもらえたことで、いい気になっていたのだと思う。もつとのし上がってみたい、自分がどこまでやれるのかを試してみたい、と。

あるいは内心では『父を越えられるくらいの』成功を収めてやりたい、などという対抗意識のようなものもあつたかもしれない。しかし、思えばそう考えていた時点で勝負にすらなっていなかった。

近いうちに、400万ドルを超える借入金返済と200人規模の従業員とその家族の生活の保障のために、私はトップとして全力

を尽くして生きて行かねばなくなる。もう引き返せない。
今更『ある人の遺言に感化されて……』などといって個人的なわが
ままで投げ出そうとすれば一体どれほどの混乱を生むのか、考えた
だけで恐ろしい。

思い返せば、史上最強の三冠馬とも言われたセクレタリアトは、
勝つことが全ての、成功と幸福な余生とが直結する競馬の世界に生
まれたからこそ、幸せになったのだと思う。 たった一つの必要十
分たる才能に恵まれていた時点で、競走馬としてのみならず、まさ
に『幸せのエリート』にふさわしい馬生が約束されていたわけだ。
自分の現状をいかにも中途半端と思える私にとって、今ではそれ
が非常に羨ましく感じられる。

「ふう……」

私はおもむろに冊子を閉じて立ち上がると、冊子も空き瓶も電灯
もそのままに、ヨロヨロとした足取りで寝室へと向かった。

私は明日、昼から飛行機でカリフォルニアへ飛び、すぐに商談と
会食を合わせて4件こなすことになっている。その翌日に一旦父
の葬儀のために帰り、そのあとまた現地で仕事に戻る。それから
は少なくともあと3日、この家には戻れないだろうし、あと半年、
休日らしい休日を過ごすことはできない。1ヶ月前、こんな当面
の多忙をきわめる暮らしと引き換えにして、私は社会的な成功を欲
したのだ。

これは父が言うところの、経済的・社会的幸福のために思想的幸
福（自由）が犠牲になったケースなんだろう。

月の光に照らされていつそう目立った寝室のベッドに、吸い込ま
れるように倒れこんだ。いつもは大して気にならなかった体の疲

れが、今夜は激しく全身で感じられた。

手記の中で父は自分のことを愚かだと語った。だがとある幸福を追い求めている最中に、異なる幸福のあり方そのものを思い直すことができる人間は、そう多くはいないはずだ。私もこれまで、その点を一瞬も疑うことがなかったのだから。

父親は、私の知る限りにおいて、最も人生の幸福を極めたと思えた人間だった。

最後に『もう少し早く教えてくれよ』などとちよつとした文句を心の中でたれながら、ベッドの上で仰向けになった。

そして、敬愛する父親の冥福を祈りながら、ゆつくりと目を閉じた。

ふと目覚めればそこはおそらく夢の中で——近くにいたのは、だいぶ若返った姿の父と、軽やかな足運びで走り回るセクレタリアトだった。

彼らはエリートになり損ねた私を笑いこそしないが、その場に居ること自体がとても恥ずかしく思われた。

S e c r e t a r i a t - 幸せのヒリート -

T H E
E N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2652h/>

Secretariat-幸せのエリート-

2010年10月13日19時05分発行